日本の青少年における弾性力（resiliency）に関する研究
—個人的、環境的なリスクファクターとプロテクティブファクター—

ジュリー・ハドー　大塩　陶子　トム・ラスター
（デンバー大学）　（ミシガン州立大学）

田中　康雄　二宮　信一
（国立精神・神経センター精神保健研究所）　（北海道大学）

<要　旨>

われわれは北米、ヨーロッパ、オーストラリア、ニュージーランドにおいて、危機的環境に直面した青少年の適応力に良い影響を与えると理論化されているプロテクティブファクターが、日本におけるプロテクティブファクターと同様であるかどうかを調査研究した。また、西欧諸国で特に悪影響を与えるリスクファクターが日本にも存在し、青少年発達に同様の悪影響を与えるかどうかも調査研究した。さらに、日本のメディアで取り上げられている独自に懸念されるリスクファクターも測定した。

2002 年夏、北海道、札幌市の大学生、短大生、専門学校生を対象に、家庭内、学校生活、友人関係、地域という多種の環境の中から抽出されたエコロジカル的な枠組みを用い、26 のプロテクティブファクターと 25 のリスクファクターを測定した。それぞれについて、情動不安、非行、薬物使用、アルコール使用、喫煙、性的行動の 6 つの変数との関係を統計学的に分析した。結果、調査したプロテクティブファクターは、26 因子中 14 因子が、回帰モデルにおいて、少なくとも 1 度は各モデルの予測因子とみなされた。すなわち、欧米諸国で発見されている 26 因子中 14 因子が、日本の本研究の調査においてもプロテクティブファクターであると考えることができる。さらに、リスクファクターについては、欧米諸国で認められている 20 因子中 19 因子が今回の日本における調査からも、リスクファクターとみなされた。また、日本独自であろうと仮定した 5 つの要因については、すべてリスクファクターとみなされ、計 25 因子中 24 の要因が日本の青少年にとって悪影響を与えることが明らかとなった。

<キーワード>

弾性力（resiliency）、プロテクティブファクター、リスクファクター、青少年、エコロジカル的な枠組み、性（gender）

【はじめに】

弾性力（resiliency）は、日常の生活のなかで著しいストレスを経験したにもかかわらず、その逆境に屈服しなかった個人が有するものである。個人は、内的に存在する、もしくは環境から得られるプロテクティブファクターにより、危機的状況に対しても適応することができる。現在、弾性力（resiliency）に関する研究は、成長や発達を促進するプロテクティブファクター、もしくはそれを妨げるリスクファクターを測定することに焦点がおかれている。個人が所有しているプロテクティブファクターと、その個人が属する環境に存在するプロテクティブファクターに関する多くの研究成果が得られている。それによると、アメリカ合衆国、ヨーロッパ、オーストラリア、ニュージーランドという異なる地域において、同様なプロテクティブファクターが確認されている。しかしながら、われわれの知るところによると、弾力性（resiliency）の問題もプロテクティブファクター、リスクファクターの研究も日本では行われていない。

第二次世界大戦の敗戦後、短期間で復興を成し遂げた日本人は、弾力性（resiliency）があると推定される。これまで教育システム、経営実践、先端技術、機械工業に関する調査は多くの研究者たちによって行われてきた。一方、日本文化の特徴として、過酷な経験を我慢し、困難を乗り越えることが美徳であり崇高であるとみなされてきた。しかし、弾力性（resiliency）があると推定される日本人の、個人的、環境的プロテクティブファクターについて、系統的に調査したものを見つけることができなかった。

危機的状況のなかで、青少年の発達に肯定的な影響を与えるプロテクティブファクターについては、これまで北米、ヨーロッパ、オーストラリア、ニュージーランドの各地域で研究されてきた。本研究の目的は、日本人にプロテクティブファクターが存在するのか、存在するのであればこれまでの結果と同じものであるか、さらに、青少年発達に肯定的な結果をもたらすか否かに焦点をあてている。一方、特に悪影響を与えると認められているリスクファクターについても同じ視点で検討し、日本独自に懸念されるリスクファクターも加えて測定した。

今回は、情動不安、非行、薬物使用、アルコール使用、喫煙、性的行動の６つの変数とプロテクティブファクター、リスクファクターとのそれぞれの関係を検討し若干の考察を加えた。

【方法論】

エコロジカル的な枠組み

本研究では、エコロジカル的な枠組みを用い、プロテクティブファクターとリスクファクターを測定した。ライフサイクルを通し、人間と環境は常時、双方に影響を与えあう（Bronfenbrenner, 1989, 1986, 1979）。そのなかで、人はいくつもの異なる環境のなかで発達する。発達に最初の影響をもたらす構造はマイクロシステムと呼ばれる。マイクロシステムとは、“物理的、物質的な特徴と関わり、気質、性格、価値観のシステムの特徴を有する他者と相互に作用しあい、発達する個人が経験する活動、役割、対人関係のパターン”として定義される（Bronfenbrenner, 1989, p. 227）。子どもが存在する最初のマイクロシステムとは、母と子どもの間に相互作用がもっとも頻繁に生じ

る家庭である。子どもは成長するにつれ、学校、地域、友人関係などのたくさんのマイクロシステムを発展させる。この研究では、家庭、学校、地域、友人関係のマイクロシステムに存在すると思われるプロテクティブファクターとリスクファクターについて測定した。

プロテクティブファクター

プロテクティブファクターとは、個人が発達するうえで、肯定的な影響を及ぼす個人および環境が持つ要因である。本研究では、個人的、環境的なプロテクティブファクターを測定するためにHaddow Ecological Protective Factors for Young Adults (HEPFYA)を用いた。

個人的なプロテクティブファクターとは、肯定的な発達を促進する個人が持つ社会的、情緒的、認知的、身体的、倫理的な強さである。自立性、セルフ・エフィカシー(自己効力感)、未来を信じる力、楽観主義、ユーモアのセンス、気楽な気質(easy temperament)、容姿、倫理観、精神的柔軟性、EQ、精神性(スピリチュアリティ)、社会的サポートを認知する能力である。

環境的なプロテクティブファクターとは、友人関係、地域、学校、家族といった各マイクロシステムに存在する。それらはパートナーとの関係、社会的ネットワーク、協力的な友人、地域感情、集団的な効力感、社会資本、学校への帰属感、学校での良き指導者との関係、家族への帰属感、養育者間の安定した夫婦関係、価値観を教える養育者、家族の経済的安定、父親との関係、母親との関係、などである。

リスクファクター

リスクファクターとは、人間に悪影響を与える環境的もしくは個人的な要因である。個人の基本情報とLife Events Survey for Japanese Youth (LESJY)を用いて測定した。それらのリスクファクターの例として、病歴、身体的虐待、性的虐待、性的対象の混乱、アルコール使用、安全でない地域での居住、学校でいじめられた経験、養育者の鬱、ドメスティックバイオレンスの目撃、養育者との性格の不一致、社会的サポートのない養育者、アルコール使用の養育者、子どもに無関心の養育者、子どものまわりにいない養育者、きょうだいとの差別、頻繁な引越し、狭すぎる家などがあげられる。

日本人独自のリスクファクター

社会的不安を惹起させる現象のうち、新聞等のメディアをにぎわせている、援助交際への関与、テレクラに関わっている母親、風俗に通う父親、性による不平等間、ギャンブルを日本独自のリスクファクターとした。なお、この抽出は恣意的なものである。

【対象】

北海道、札幌市の18歳から22歳までの4つの4年生大学、2つの短期大学、そして3つの専門学校という異なる形態の学校の学生を対象とした。対象総数は802人である。

【結果】

対象全体、また男女別に、すべての変数に対して重回帰分析を用いた(表1参照)。

日本文化は、他文化とは異なる特徴をもっていると思われるが、プロテクティブファクターにおいては欧米諸国の結果と同様に存在していた。欧米で認められている26因子中、14因子が回帰モデルにおいて、少なくとも1度は各モデルの予測因子とみなされた。有意性がみと

められた個人のプロテクティブファクターは、自立性、セルフ・エフィカシー（自己効力感）、未来を信じる力、ユーモアのセンス、気楽な気質、倫理観、EQ である。友人関係のプロテクティブファクター、すなわちパートナーとの関係、社会的ネットワーク、協力的な友人は、4つの変数に対して予測因子となった。地域におけるプロテクティブファクターは、どの変数に対しても予測因子にはならなかった。学校におけるプロテクティブファクターのうち、学校の良き指導者との関係だけが予測因子であった。家庭におけるプロテクティブファクターは価値観を教える養育者、家族の経済的安定、強い母親との関係が予測因子となった。

養育者との性格の不一致を除く 24 のリスクファクターすべてが、少なくとも 1 度は回帰モデルの予測因子となっている。

日本独自のリスクファクターとして測定した援助交際、テレクラに関わる母親、風俗に通う父親、性による差別感、養育者のギャンブルは予測因子となっていた。

また、対象を男女別に分けてプロテクティブファクターとリスクファクターの検討を加えた。自立心、セルフ・エフィカシー（自己効力感）、未来を信じる力、ユーモアのセンス、気楽な気質、倫理観、EQ、協力的な友人、学校での良き指導者、価値観を教える養育者といった 11 のプロテクティブファクターは、男女に違いをみせる予測因子となった。

病気、性的虐待、援助交際、性対象の混乱、安全でない地域での居住、いじめられた経験、鬱状態の養育者、子どもに関心のない養育者、子どものまわりにいない養育者、テレクラに関わっている母親、テレビにおける暴力、セックスシーンの視聴といったリスクファクターは、男女ともに予測因子となった。しかし、25 中 13 のリスクファクターは男女に違いをみせる予測因子となっていた。

変数すべてに予測因子となったプロテクティブファクター、もしくはリスクファクターは認められなかった。しかし、安全ではない地域に居住していたというリスクファクターは、情動不安を除くすべての変数の予測要因となっていた。

【今後】

本研究からは、日本の青少年の弾性力（resiliency）を促進するプロテクティブファクター、もしくはそれを妨げるリスクファクターに関する興味深い結果が得られた。

日本におけるプロテクティブファクターとリスクファクターは、これまでの欧米諸国の結果と同様に存在していた。 本研究で認められたプロテクティブファクターの多くは、個人が持つものであり、地域に存在するものは認めることが出来なかった。しかし、安全ではない地域での居住は、情動不安以外のすべての変数に対し、予測因子となっている。個人の発達にもたらす地域の影響については、さらなる検討が求められよう。

一方、日本独自の特徴として加えられたリスクファクターすべては、青少年の発達に影響を与えることがわかった。このリスクファクターは恣意的に抽出したものであるため、さらに日本独自の特徴についてより詳細に研究する必要があると思われる。

また、男女別の分析から、リスクファクターは男女別に異なる影響をもたらすことがわか

った。これは、コロンビア大学にある National Center on Addiction and Substance Abuse で発表された薬物とアルコール使用と、喫煙を予測するリスクファクターにおいて男女間の相違が認められた(Califano, 2003) ことと相似している。加えて、プロテクティブファクターにおいても男女間の違いが認められたことから、今後、日本の青少年のための弾力性 (resiliency) を促そうとするときに、この性差に留意する必要があるだろう。

今後、より組織的に国際比較や日本独自の要因、さらに男女間における相違についての検討を加え、具体的に役立つ青少年の発達を促進する対策を確立していかねばならない。

表 1

変数に関係を示したプロテクティブファクターとリスクファクター

対象全体(S)　女性 (F)　男性 (M)

予測因子	情動不安	非行	薬物使用	アルコール使用	喫煙	性行動	
							初体験年齢
個人							
プロテクティブファクター							
自立性						-F M	-F
セルフ・エフィカシー（自己効力感）	S F						
未来を信じる力						-F	-F
楽観主義							
ユーモアのセンス				S	S M	F	F
気楽な気質	-S -F		-S -M				
容姿							
倫理観	S M	-S -M				-S -M	
精神的な柔軟さ							
EQ	-S -M				-S -M		
精神性（スピリチュアリティ）							
社会的サポートの認知							
リスクファクター							
病気	S F M		S				
性による差別感					-F		
身体的虐待歴	S M						
性的虐待歴						S F M	S F M
援助交際	F		S F M				
性的対象の混乱	S F M		S			-S -M	-S -M
アルコール使用	-S	S M			M	S F M	S F M

予測因子	情動不安	非行	薬物使用	アルコール使用	喫煙	性行動	
							初体験年齢
友人関係							
プロテクティブファクター							
パートナーとの関係						ＳＦＭ	ＳＦＭ
社会的ネットワーク				ＳＦＭ			
協力的な友人	-M				-F		
地域							
プロテクティブファクター							
地域感情							
集団的な効力感							
社会資本							
リスクファクター							
安全でない地域での居住		ＳＦＭ	ＳＦＭ	ＳＦＭ	ＳＦＭ	ＳＦＭ	ＳＦ
学校							
プロテクティブファクター							
学校への帰属感							
学校での良き指導者				-F			
リスクファクター							
いじめられた経験	ＳＦＭ						
家族							
プロテクティブファクター							
家族へ帰属感							
養育者の安定した夫婦関係							
価値観を教える養育者	-F			-S -F-M			
家族の経済的安定					-S		
父親との関係							
母親との関係		-S -M					

予測因子	情動不安	非行	薬物使用	アルコール使用	喫煙	性行動	
							初体験年齢
リスクファクター							
養育者の鬱	SFM						
ドメスティックバイオレンスの目撃	SM	SFM					
養育者との性格の不一致							
社会的サポートのない養育者		S					
養育者のアルコール使用		-S -M					
子どもに無関心の養育者	SFM				F		
子どものまわりにいない養育者						SFM	SM
きょうだいとの不平等	SF						
テレクラに関わっている母親	F	SFM	SFM	-S -F			
風俗に通う父親		SM				SF	SF
ギャンブル			SF				
頻繁な引越し	SF	M			-F		
狭すぎる家	SM						
メディアの影響							
ヒップホップ		M					
暴力、セックスシーンの視聴	M	SFM			SF	SF	SF

ベータ係数： $p \leq .05$

【参考文献】

Bronfenbrenner, U. (1989). Ecological Systems Theory. *Annals of Child Development*、6, 723-742.

Bronfenbrenner, U. (1986). Ecology of the family as a context for human development: research perspectives. *Developmental Psychology*, 22:6, 723-742.

Bronfenbrenner, U. (1979). *The Ecology of Human Development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Califano, J. (2003). The Formative Years: Pathways to Substance Abuse among Girls and Young Women Ages 8-22. *National Center on Addiction and Substance Abuse (CASA)*. New York: Columbia University.